

中村 敏著

「著名人クリスチャンの結婚生活」 評・内藤 仁美

きみよし

「あの人はどんな人？」と聞けば、普通答えは性格的なことになりません。しかし、特に名のある人だったら、地位とか業績について答えるでしょう。「人間は何をしたかということより、何のためにしたのかということが大切だ」と言った人もいます。動機に関する問題です。しかし、「あの人はどんな家庭人でしたか？」という質問に答えることはさらに大切です。

今回、中村敏師はこの面に光を当てて5名の外国人と12名の日本人、それもキリスト信者で、かつ歴史に名を残すほどの著名人の家庭、結婚生活を紹介しています。まさに労作と言うべきです。

そもそも偉人伝は数多くありますが、ほとんどは業績を語るもので、家庭生活を語るものはきわめて少ない気がします。あってもほんの数ページ、それも大部分が幼少年期のエピソードなどで占められます。ゆえに、資料そのものが少なかつたはずですが、著者は丹念にそれを探し集めました。

考えてみると、聖書の人物伝と言えるものの中には家庭生活に重

点をおくものが多いとありまして、その代表はアブラハムであれば「世継ぎとなる子どもをどのように与えられたのか」ということに尽きます。すなわち、妻サラとの間に生まれたひとり子イサクのことで、イサクと共に神の前に献身したこと、そしてイサクの結婚、それが終わると、アブラハムの伝記はもう終章に向かいます。妻サラの死、そして彼の死。実は、アブラハムは再婚もしていますし、更に6人の子が生まれてもいますが、そのことは詳しく語られません。彼の伝記は業績中心ではなく、妻サラとの家族が中心でした。

著者は、外国人からルターを含む5名、日本人から戦国時代の細川ガラシヤ夫人よりいきなり明治維新期へ飛び、全部で12名を選び出しました。この少々粗すぎる人選は、対象をクリスチャンに限っていること、またキリスト教禁制と迫害、また近世の戦争時代を考えればやむを得ないことと思えます。

その中で、現存者三浦光世氏を取り上げたり、著者自身の体験も

語っていることは、読者に親近感を抱かせるのではないのでしょうか。取り上げられている17名の業績は論ずる必要もないほどです。しかし、今さらながら結婚生活は、山あり谷あり、時には悲しい結末を迎えたり、決して平坦ではありません。著者は、よくそのことを拾い上げ、読者に考える論点を提示しています。

井深樞之助の項に触れられている明治初期の人々の結婚観について、現代人はきわめて奇異な思いがするかもしれません。「本人の意志ではなく、親の選択した人を選び難く受ける」などと言うのですから。今の時代、見合い結婚する方は、わずか6%くらいだそうです。あとは本人同士で全部決める時代なのです。これには絶対的基準などないと言っているでしょう。これについて思い出されること、それはある宣教師がインドで聞いたという一つのことばです。

「ある人は、自分の愛する人と結婚すると言います。しかし、私たちは自分の結婚すべき人を愛します」

読者として希望を申し添えるなら、次の2人の家庭生活について著者にぜひまとめていただきたいものです。

1人はヘボン宣教師と同時代に日本宣教に情熱を注いだジェームス・バラ宣教師。死ぬかと思うほどの嵐の中を日本にたどり着いた時、マーガレット夫人は弱冠19歳だったとのこと、すこいですね。

もう1人は、群馬県安中教会で40年にわたり伝道牧会をした柏木義円牧師(1860-1938年)です。新潟県に生まれ、同志社で学び、「上毛教界月報」で非戦平和宗教と教育の自由について堂々と論陣を張った方です。「ファミリー・フォーラム」誌に番外編として寄稿していただけないでしょうか。

「著名人クリスチャンの結婚生活」

ファミリー・フォーラムより好評発売中

B6判 144ページ
定価 1,050円(税込み)